

昭和三十七年七月二十三日発行（毎月三種郵便物認可）

（通第一六四号）

慈

光

第十四卷 第十一号

目次

教行信証「三信狀」（六）	近角 常觀：（1）
石の下と上の空間	川畑 愛義：（8）
母の一週忌を迎えて	西本清人：（13）
内は愚にして外は賢なり	花田正夫：（20）

教行信証「信卷」三信积

(六)

近角常觀

又次ぎには
光明寺の和尚の云く。この雑毒之行ざくどくのぎょうを廻して、彼の仏

れし故、斯く申すのであります。先ず初めに
『此の雑毒の行を廻して、彼の仏土に求生せんと欲う者
は、これ必ず不可也』

を以ての故に。正しく彼の阿弥陀仏因中に菩薩の行を行じたまひし時、乃至一念一刹那も三業の所修、皆是れ真実心の中になしたまえるによりてなり。凡そ施したまう所趣求をなす。亦皆真美なり。又真美に二種あり、一には自利真実、二には利他真実なり乃至不善の三業は必ず真実心の中に捨て給えるを須いよ。又若し善の三業を起さば必ず真実心の中に作したまえるを須いよ。内外・明闇を簡はず、皆真実を須いるが故に「至誠心」と名く、と。抄要す。

これは前に一度お引きなされたる（前年度の講本にあてたる處）善導大師、至誠心釈の御文の要点をここに重ねてお引き下されたのである。

これは昨日も或方が頻りに信仰を得度い／＼と苦しまれて、目もあてられぬ様に苦しんでお出でになる。その様子を見て私も優しい話してては、其の方の心に通らぬ故、昨弘は「あなたは大変言者辰りて居られる。外の方は家庭

の内輪か折れ合わぬとかにて、其の自分のして見ようなき
浅間しき心の上へ、このして見よう無き自分を捨て給わぬ
お慈悲と頂かれる故、直に其の広大のお慈悲にましませし
かと喜ばるのであるも、あなたは唯信仰を得度い／＼
と、自分の浅間しい方は放つて置いて、大層信者振つて居
られる」と申すと、其の方は「いや私はそのようなことは

毛頭思わぬ。今晚にも死ぬると思うて、一生懸命求めてゐるのである」と。そこで私は「いやそれでは、あなたは地獄に行くのがいやだから、極楽に行き度いから、求めてので無いか。みんなが地獄に行くのがいやだから、極楽に行きたいから、信仰を欲しい、又今日青年の人にはすれば、信仰を得ると人格が高まるから、信仰を得たい、信仰を得ると活動が出来るから信仰を欲しいと求めてるのは、皆これと親が親に菓子が欲しい、金を欲しいと何程求めても、親は決して与えはして下さらぬのである。親は汝菓子を求むるも、菓子を喰うと胃を害する、それを親は知つて居る故、その汝のため、眞にためになるものを遣ろうと言うのである。汝に金を遣ると、汝のためによくなないから金を遣らぬ。この金を愛する汝の心を哀れむ親の心を知つてくれ、と仰せ下さるのである。

この我が財産は汝に金使いさすためにこさえた財産ではない。その金使いする汝を救い度いために作った財産故、金も遣ることはやるが、先ずこの親心を聞いてくれ、といつて下さるお慈悲なのである。故にこちらより信心を得て極楽に生れたいなどと、そんなことは不可である」とお話をした事であります。

即ちこれが、雑毒の行を廻して彼の仏土を求生するは、是れ必ず不可であるとお示し下さる処である。してその不可であるは何故であるか、何故必ずいかぬのであるか、
という即ち次に

即ちこれが、雑毒の行を廻して彼の仏土を求生するは、
走れ必ず不可であるとお示し下さる處である。してその不
可であるは何故であるか、何故必ずいかぬのであるか、
こうに即ち次に

『何を以ての故に、正しく彼の阿弥陀仏、因中に、菩薩
の行を行じたまひし時、乃至一念一刹那も三業の所修、
皆これ真実心中に作したまひしに由つて也』

この一曲つて也」を読み違えるといかぬ。うつかり読みそ
こなうと、茲は「仏も三業の所修、一念一刹那も真実心中
になし下されたのだから、我々も真実心にしなければなら
ぬ、のである。然るに、我々雜毒の行を以て仏に向うから
いかぬ」と取れるのである。そうではなく、ここは、「そ
の仏が長々因中に於いて、一念一刹那も真実心中に作し下
されたるその遺る瀬無き広大の御念力を私へ下さるに由つ
て頂けるのである。この仏のお慈悲はその自力雜毒のして
見ようなきものを助けると、長々御苦勞の塊りの御慈悲な

れば、こちらから求める事では是れ必ず不可である。このして見よう無き者のため、三業の所修、皆眞実心中になし下されたる其仏の御眞実に由り、如何な不眞実の私も有難うと頂けるのである」とお示し下されたのである。

で昨日講話後に、今の方が懲悔して言わるには「先程先生から信者振りてると言われた時には、最早二度とこへは聴きに来まいと思うた程であつたが、その浅間しき私の根性を知り抜きて、その者を哀れと仰せ下さるお慈悲と頂く時は、最早得度いの得られぬのという信仰は無くなり、唯向うより賜わるお慈悲でありました」と深く喜ばれた。其の喜ばる有様は實に『行巻』の

『明かに知んぬ、是れ凡聖自力の行に非ず。故に不廻向

の行と名くる也。大小の聖人、輕重の悪人、皆同じく

齊しく選択の大宝海に帰して念佛成仏すべし』

とある御文通りである。總て仏の方よりこの私が不懃と、一願一行も、衆生のため／＼として下さる。この仏の御廻向によつて頂けるのである。即ち彼の仏が因中に於いて一刹那も遺る瀕無く、眞実心中に作し下されたに由つ

て信心を得て活動しよう、人格を高めようなどといふ念此方が頂けるのであります。

は、皆これ雑毒の善、虚偽の行である。即ちこちらは一行

一善もして見ようなき、地獄は一定すみかの身なのであ

る。その仕て見よう無き身に、人格も活動もあるものか。その下劣、劣等の私を捨てさせられず、その私のため広大の悲願を起させられ、飽くまで眞実心にして待ちかね賜わる遺る瀕なき大悲と聞く一念に、我が身を地獄の底に投げつけて、広大のお慈悲、有難うと頂くのである。是れすなわち『歎異鈔』の

『自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念佛をもうして地獄にもおちて候わばこそ、すかされたてまつりてという後悔もそらわめ、いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし』

とある処であります。

○

次に

『凡そ施し給う所、趣求をなす、亦皆眞実なり』

仏より施して下さる所、私共が皆趣き、求め頂戴する、それが皆、眞実心のお施し故、頂くところも亦皆、眞実である、とお示し下されたのである。是れ仏が我々にお慈悲を届くると、遺る瀕なく御苦勞下さる処であります。これは「趣求」というは、設え学舎の「求道」の文字でも、『大經』に、

『譬えば大海を一人升量せんに、劫數を経歷せば、尚底を窮めて、その妙宝を得べきが如し。人至心あり

て、精進に道を求めて止まずんば、かならずまさに魁果すべし。何の願か得ざらん』

とある処より、尚はじめ名をつけた時は、一人づつでも信仰に入り下さる時は、結局社会全体が信仰に入る事になると、その意でつけたのである。處が来て下さる人が、皆道を求むる／＼と来るるもの故、趣求が自力の趣求になり、自力の求道になる。これはこまつた、名を代えんならんかと一時は思つたのですが、さて考えて見ると「大海を一人升量せんに……まさに魁果すべし」とは、法藏菩薩が世自在王仏の前に於いて、私のため道を求めて下された時の言葉である。法藏菩薩が我々のため道を求めて下されたとなると、求道が他力の意味となる。即ち趣求は仏が我々のため施して下さる所より、我々に趣求せしめて下さるのである。即ち趣求は我々に遺る瀕なきお心を届けて下さる有難き処であります。

次に

『又眞実に二種あり。一には自利眞実、二には利他眞実なり』

眞実に二種あつて、一つには自利眞実、二には利他眞実である。自利眞実は自力の眞実であつて、利他眞実は、他力の眞実である。即ち仏の眞実であります。

『不善の三業をば必ず眞実心中に捨てたまえるを須いよ。又若し善の三業を起さば、必ず眞実心中に作すべし』と読むべき文なるも、それでは自利眞実なる故、親鸞聖人は、「不善の三業をば必ず眞実心中に捨て給えるを須いよ」と。即ち我々は、不善の三業を如何にしても自分で捨てられぬ。欲覧眞覚対覺を起さざらんとするも、起る我々である。故にその者が他に有るではない、今斯く其のして見よう無きを哀れみて、其者のために長々不善の三業を眞実心中に捨てさせ給いたるその御心を用いさせて貰うのじや、とお示し下されたのである。即ち仏が私のため斯くまでになし下されたるそのお慈悲を頂くのである、とお知らせ下されたのであります。

又若し善の三業を起さば、それは自力の方で善をするのでは無い。仏が眞実心中に作して下されたる善の三業を用いさせて貰うのである。即ち仏の方で穢れをおとして下されたる着物を有難うと着る処より現われ出する働きである。斯くして眞実心中に作し下されし所を須いて「内外明闇を簡ばず」……内外、明闇の区別なく、凡ての者が皆こ

の仏の真実心一つを頂いて、夜が明くの故に、その広大の御心を至誠心と言うと仰せ下されたのである。この内外明闇は、後に丁寧にその区別を挙げさせられてある。要するに世間の出家も在俗も、男も女も、幼も老も、皆このお慈悲一つを頂くのだとの御知らせであります。

○

又次には
『爾れば大聖の真言、宗師の釈義、信に知ぬ、斯の心は、則ちこれ、不可思議不可称不可説、一乗大智願海の廻向利益他の真実心なり。是を至心と名く』
これは今迄のところを引きくるめて御結び下された御文である。『大聖の真言』といふは、言うまでもなく、大聖釈尊の經文の事で、ここでは前記『大經』『如來會』の御文をお指し下されたのである。又『宗師の釈義』は、上にあげさせられた善導大師の御文の事を指されたのであります。即ち上の經文、釈義で何が明に頂けるとならば、次に、

『信に知んぬ。則ちこれ不可思議不可称不可説、一乗大智願海の廻向利益他の真実心なり。これを至心と名く』
である。實に我々、この世で互に隔て、争いをなし、弥々となれば一分一厘人に譲る事が出来ぬ、一点でも他に不愍の心が起るならよけれども、一点でもその心は起らぬ、して見ようの無き我々である。然るにその者のそにして見よう

ないのが可哀想であるとは、實に不可思議、不可稱、不可説である。

この広大な思召でなくしては、この五分々々の生死の世の中に、迷いのきづなの絶たれるという期は無い。嘗て或人は苦しみて何うにもして見よう無く「誰か一寸でも自分の心を動かして呉れんか」と言われたが、その如く行きあたつては一分一厘、動かし難き私の心。爾るに私は私のそのして見よう無きが不憫であると、これを一分哀れみ下されても駄目である。二分して下されても、私の心に貫徹せぬ。遂に私の頂けるまで、飽くまで恵み、飽くまで真実にやり通して下された。この御心はこれを何と言わんか、實に不可思議、不可稱、不可説、一乗大智海の廻向利益他の真実心である。斯く長々しく聖人が、あらゆる言辭を連ねてお示し下されたは、この心あまりに広大にして、言つて見ようが無い故である。『和讃』には又、

弥陀智願の廣海に、 凡夫善惡の心水も

帰入しぬればすなわちに大悲心とぞ転ずなる。

妙陀の智願海水に、 他力の信水いりぬれば

眞実報土のならいにて

煩惱菩提一味なり。

本願円頓一乘は、 逆惡攝すと信知して

煩惱菩提無二と、 すみやかにとくさとらしむ

とのお言葉もあります。即ちこのお心は、是れ實に他力の

窮極、本願一実の大道である。釈尊一代の經説も、要する所この仏のお心一つをお説き下された外に無い事となる。その広大なる、この五逆十惡、謗法闡提の私を見捨て給わず、飽くまで人生の惡の根本を断絶して下さる仏の御恵みの真実である。故にこの仏の真実心が至心であると、お示し下されたのであります。

○

又真実と言うは如来であつて、如来が即ち真実である。茲に仮性とあるは、即ち信心仮性のことである。ここに仮性などの文字があるため、古の学者などもこれに縛られ、

ここに虚空とあるは、所謂大空の意で無く、何とも名状し難き、絶対不二の仮境界故、それを虚空と表されたのである。

又真実というは仮性であつて、仮性が即ち真実である。茲に仮性とあるは、即ち信心仮性のことである。ここに仮性とは我々の心の事であるなどと持つて来るのであるも、そんなことと言う必要は更に無い、仮性とは此の悪人を見捨て給わぬ仮性でましませばこそ、我々の信心が頂け、生死を離るる本となつて頂けるのである。若し此の仮性でましまさずば、永劫に凡夫が生死を離るる本は無いのである。故に真実は何が真実と言えば、此の遭る瀬なき仮性が真実である。他のものは皆仮門である。

『和讃』には、

念仏成仏これ真実、 宗

万行諸善これ仮門

權実真假をわかつて、 自然の淨土をえぞしらぬ。

聖道權化の方便に、 衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる

悲願の一乗帰命せよ。

我々は自分で仮性開見などの出来る者で無けれども、この
『真実』と言うは、涅槃經に言わく、實諦は一道清浄にして二有ることなし』……真実と言うは、この罪惡の者を見捨て給わぬ本願一実の大道の一つであつて、この他に二あることなし、とお示し下されたのであります。

して見よう無き者を見捨て給わぬお慈悲一つで、涅槃の華が開かせて貰えるのである。してその広大のお慈悲一つを頂きた時が、即ち信心である。故に又信心よろこぶそのひとを如来^はひとしと説きたまう大信心は仮性なり仮性すなわち如來なり。

とのお示しもあります。

最後に

『釈に、不~~簡~~内外明闇と云えり。内外とは内は即ち是れ出世なり。外は即ち是れ世間なり。明闇とは明は即ち是れ出世なり。闇は即ち是れ世間なり。又復明は即ち智明なり。闇は即ち無明なり。

涅槃經に聞く、闇は即ち世間なり、明は即ち出世なり。

闇は即ち無明なり、明は即ち智明なり。已上』

こは先の善導大師の「内外明闇を簡ばず、真実心を須る」と仰せられた内外明闇の言葉を、聖人御自身に『涅槃經』の御文によりて分けてお示し下された御自釈の御文である。こは大いに意味のある御示しであります。即ち内と明とを出世であるとし、外と闇とを世間であると分けてお知らせ下されたのである。出世というは即ち世間を離れて仏道修行に専らなること、世間^{あきない}といふのは、世間^{在俗}の日暮しだである。即ち真宗に「たとい商をもし、漁すなどりをも

せよ」の御教化はここから出て來るのである。即ち如來広大のお慈悲は、鋤鉗を持ち、資生産業を當む上に喜ばせて頂くのである。親鸞聖人はここで、斯く善導大師が心の内外明闇を仰せられたお言葉を、態々『涅槃經』によりて註釈を加え、法衣まとう僧侶でも、鋤鉗持つ俗人でも、他方に世間、出世の區別が無いとお知らせ下されたのであります。

又明というは智明であり、闇というは無明である。無明は我々凡夫の事である。智明は大小の聖者のことである。

我々無明惑業の凡夫も、又智慧優れた智者聖者も、この遺る瀕無きお慈悲の外には道が無く、このお慈悲を頂く段に於いては、一味平等であると御示し下されたのである。『和讃』には又、

弥陀の報土を願うひと、外儀のすがたはことなりと本願名号信受して、悟寐にわすることなれと仰せられてあります。而してこのあとに『涅槃經』の御文を引かせられてある。こは即ち『諸經和讃』にお示し下さると同じく、釈尊一代の説法は、この遺る瀕なき仏の大悲をお知らせ下さる外に無いとの恩召より『涅槃經』を以て弥陀の本願をお示し下されたのであります。以上

夏季求道会、第四日第一席。

石の下と上の空間

川畑愛義

墓といふものには二つの意義があるように思われます。

その一つは、いうまでもなく亡くなつた本人の魂のいこいの土地とも言えるものですし、今一つには後に残つた家族のため、先祖代々の象徴として築かれるものです。

弟の遺族は主として東京に住んでおり、亡くなつた所は三重県の津であります。故人の永遠の憩いのところ、そしてやがてはまた私たちも帰るべき土地、その選定についてそれほど思いめぐらすこともなく、聖人の西大谷の本廟の御近くにという念願になつてしましました。勿体ないことは存じますが、御開山聖人のお側というだけで何がなしに有難く、懐しく、胸が膨らむ思いがいたしました。そして一時的な錯覚かも知れませんが、死ぬことが或る意味で親様の懷に帰るような気が致しました。聖人が亡くなれば既に七百年、その御信仰は如來の本願によつて今なお私たちの心のなかに大きな力となつていて下さいます。

幾月日かたつて、私は昨年早春亡くなつた弟の墓のことを考えなければならなくなりました。私自身、故郷はあつても無いような浮草稼業で、いわば根無し草のようなものですから、何處かに新しい墓をきめておこうということになつたわけです。

つぎに、どんな墓を建てたらよいかといろ／＼思いめぐ

らしましたが、いざとなると、なかなか良い考えが湧いてまいりません。墓一つ建てるのにも親類一同の意見はまちまちで、私個人としての思いも乱れていたことも事実のようです。

そこで、あちこちの墓地を見学に参りましたが、その気になつてみると墓も婆婆の姿として浮世の風が容赦なく吹きつけております。哀れな貧しい小さな墓石の傍らに、磨き上げた花崗岩や黒御影の幾段構えの大きな墓標が立ち並んでいます。或建築家の設計したお墓は雄大で権威に満ちており、なおこの世の勢を誇つているようです。かと思うと、雑草の中に荒れ放題、石ころ同然の墓標もあります。それでも誰かのお墓であるに違いありません。古い歌に

鳴滝の夜の嵐に碎かれて散る玉毎に宿る月影

というのがあります。

三

或る日の夕方、私は洛東の法然院の山の端にある多くの墓石の並んでいる小道を歩いていました。とりわけ煩惱の深い私は、人気の無い夕べの墓地を歩くのが、若い頃から好きでした。

その日も夕陽が愛宕山あたごやまに沈もうとして、夕焼の雲間から斜の光線が墓地を照らしていました。まことに千種万態の墓標の上にあかね色の夕陽がしんしんとして照らしたり

は静まりかえつていました。

たとい、ひとびとのありし日の職業や身分はどのように違つても、大悲の如来はあまねく十方の衆生をみそなわしてわけへだてがない、その壯厳の啓示のようにも思われました。

暫らくお墓の小道を歩いていると山陰に一つの小さい、やさしくも温雅なお墓の一つが見つかりました。わが国では未だ男性の墓と女性のそれが分化していないようですが、このお墓などは一見して品格のある中年婦人の墓標としてふさわしいものに思われ、ふとその前に足を停めました。するとそれが或る有名な歌人の前の夫人のお墓であることがわかりました。実は私はずつと以前、この歌人の亡くなつた妻によせる悲しみを詠んだ短歌と慕情をつづった記録を読んで深い感銘を受けたことがあります。しかしその後この歌人はまた新しい恋愛をされ、再婚して今は京都にはおいでにならないかと存じます。それ程古くないこのお墓ですが、すでに青く白く苔がむし、山の端に夕陽の影を落としてひつそりとしています。私はその前にしばらくたたずみ、感にたえないものがありました。

いかに激しい恋愛、いかほど強い友情でもうつろいやす

いのが世の人の心の常であるようです。情熱の歌人与謝野晶子夫人の長男の光さんの語るところによると、お母さんに対する世の人びとはよくぶしつけな質問をしたそうですね。

「あなた方は熱烈な恋愛をして結婚をされたわけですがそれだけに反つて夫婦の間に倦怠期が早く来るんじやないですか？」

などと、それに対して晶子夫人は何時も同じように

「ええ、毎日倦怠期です、そして毎日新しい恋愛をしています。」

と答えていたそうです。確かに彼女は賢明にも恋愛の本態をよくわきまえており、それに対応するたゆみない努力を続けていたことが分ります。

四

聖人は歎異抄の後文において「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界」と断定され「よろずのこと、みなもてそらごとたわごと、まことあることあることなし」と宣言されました。このお言葉によつて容認されるものはも早何一つありません。これは寸毫の妥協を許さない厳しい鋭さと冷たさの否定論となつています。したがつて、そこにはあらゆる恋愛、一切の友情、そしてすべての道徳さえも光を失つてしまいます。この意味において諸行無常・万象流転と観する釋尊

に始源する仏教は、徹底した現世悲觀論であることを知られます。ですから若し婆娑世界で他に対する大きな期待をかけたり、親子の間でさえ恩愛のみを求めるならば、それらは道理にはずれていることがわかります。

しかし仏教は終始一貫して虚無論や否定論を唱えているのではないはずです。このような虚無から否定に通ずる人生觀は、すでに一切肯定の大前提になつてゐるのだと思ひます。

「よろずのこと、みなもてそらごとたわごと、まことあることなきに。」

の、このなきにのにを枢軸として、価値觀は百八十度の転換を遂げ、すべてが生かされ、一切を是認することになります。「念佛のみぞまことにおわします」だからです。ここに相対善、有限知を否定するものは、絶対の属性を有するものでなければなりません。そしてその絶対性こそは、念佛の願力であり、如來の加威力でありましょ。念佛の前に否定し尽された一切の事象、あらゆる有情が、さながらの姿でみとめられ、生かされている姿は不思議といふほかないません。しかもそれらは信の一念によつて体験される嚴然たる事実であります。お念佛によつて一切を認め、融け合う世界、おたがいに讃嘆しあう社会、そこにはむしろ、ほのくとして陽春の光ののどけさせ感するこ

とが出来ます。

「すべてよろずのことにつけて、往生にはかしこきおもいを具せずして、ただほれ」と弥陀の御恩の深重なること、つねにおもい出しまいらすべし、しかれば念佛ももうされそらう。これ自然なり云々」

と。このように他力本願に帰入してみれば、もとよりそれほど力んで否定したり、排除したりする何ものもなかつたのです。強いて答めだしてするならば、かたくなに、何ものかを擋もうとする我執だけがあつたのです。その我執の暗愚でさえ大いなる摄取の光明に照らし出されて、光の中にあるのですから、もう何も思いわざることも、言うこともないわけです。

五

墓地をさまよい歩き、暫らく行くと、若木の生垣の中にまた小さな墓が一つありました。ささやかなそしてつましい墓標は、一体何処の何家のお墓であろうかと立ち寄つてのぞいてみると、家も人の名前もなくただ「俱会一処」とだけ書いてあります。これは共に一處で会おうという意味でしようか。このお基^基を建てられた方がその御家族と一時幽冥境を異にしても、如來の本願力によつてやがてまた必らず同じ所で会うことが出来るのだという阿弥陀經の御信心からお書きになつたものと拝察いたしました。そして

考えて、草が生えないように砂利を厚く敷きました。ただ一つ宮地先生の御意向にそわなかつたのは花立てと線香台を省いてしまつたことです。これから後参詣してくれるような期待が子孫にもかけられなかつたからでもあります。それにしてこのような風変りな墓標に、造形美術の立場から創作的意欲をもやして協力して下さつた田伏茂雄氏に感謝するほかありません。

七

或る時、法然院の山の少し小高いところに、比較的新しい自然石のお墓が一つだけぽんと建つてゐるのが目につきました。これは特別の花崗岩でもなく、また貴重な石材を選んで磨きたてたものでもございません。自然の色の自然に平たい石、そのような石をただ別の自然石の上にお建てて墓石としたに過ぎないものです。それにしても何となく親しみがあり、品格のあるお墓となつています。私は何気なく何処のお家のお墓だろうかと近づいてみると、その自然石の中ほどに、ただ「南無阿弥陀仏」とだけ彫んであります。そして何も名前などはありません。そのお墓の前にじつと佇んでいると南無阿弥陀仏という御声が聞えてくるようでした。ここには人々家もなければ、誰某もなく、一切の有情が六字の中に摄取され、あなたも私も共に生かされて生き、その生命は永遠に連つてることをさ

その御信仰のひそやかな喜びの御声を聞くことが出来るよう気がしました。婆婆の縁によつては或は恨み合い、傷つけあつても、やがて大悲如來の御膝下に召換され、そこで必らず会えるのだという信心の尊さを有難いことだと思います。

かつて池山栄吉先生は、「一心正念にして直ちに来れ」という弥陀の勅命を「お願ひだから直ぐ来ておくれよ」と読まれました。如來様の方から御願いして「直ぐ来ておくれよ」と呼んで下さる御言葉に導かれているようと思ふのです。

六

話はまた墓のことに戻つて恐縮ですが、私どもの墓標は高く建てないで、西洋式に横に寝かせることに致しました。

そして弟が生前からお世話をなつて京都女子大の宮地廊慧先生のすゝめに従つて梵語^{ばんご}で「南無阿弥陀仏」と大きく先生御自身に書いていただき下に小さく「かわはた」とローマ字で入れました。仮名や訛号などを省きました。御念仏の周りはこれまで宮地先生の御発案で本廟の御紋章にあやかつて藤の花で枠付けし、家の紋章は省略することに致しました。墓地の外側の壁石に弟の遺言「悔多き男ここに眠る」など書き、子孫が草を抜くこともあるまいなど

母の一一周忌を迎えて

西本清人

母は九十五才の高齢で亡くなりました。子としては永く生きていて貰いたいことは山々であります。これ以上長生きして貰うことを望むことは無理であると思います。

母の若い頃は、蒲柳の質であらゆる病気をし、度々重病になつたことも覚えて居ります。それがこんなに長命しましたことは不思議に思われるが、一つには自分で健康に留意しましたことも、長命の原因でもあるが、一つには老境に入つて兄夫婦の温かい孝養の賜であると思う。この点は母も非常に偉であります。晩年になつて耳も遠く身体も不自由になりましてから、身の回りの世話は並大抵ではないのに、夜となく風となく細かいことに気を付けて世話して貰うたことは、母としても満足して居ましたことであろうし、我々としても感謝に耐えない所であります。

○
母の一生は幸福であつたと云うて下さる人もありますが必ずしもそうではなかつたと思います。それは若くして西本家に嫁して来まして、夫である父が長男であつたの

で、多くの弟や妹をそれ／＼片付けねばならず、厳格な祖母によく仕え、五人の子供を育て剩え父は商売熱心で営業に追われて他行勝ちの人で、一家の切り盛りは一方ではなかつたと思う。それに子供の我々に愚痴らしいことも、父に対する不平も一度も聞かさないで、父に対する威厳も尊厳も保持して、円満に一家を統べて行つたことは実に感心であると思う。ことに自分が一家を持つて色々の苦い経験を嘗めてきたこの頃、その感じが一層深いわけであります。その当時のことを思うと全く頭の下る思いがいたします、まことによくできた人であります。

それは、里方の永野家の両親が信仰に厚い念佛の行者であつたので、その家庭に育てられた母としては、所謂、触光柔軟の香が染みて居られたものと思います。

こういうわけで、母の一生は中年まで困苦と闘うてすごし、晩年以後は幸福の生活を送りました。

ことに晩年になつては、お慈悲を喜んで念佛相続して、余生を過したのであります。一・二年前からは耳が大変遠

くなりまして、こちらの言うことを理解さすには中々骨が折れました。從て自分でも、無我の境地で念佛を称えて、

「称うれば仏もわれもなかりけり」というよくな、自然法爾の境地で喜んで居ましたようです。

或る時、私にお慈悲話を、と云われるので、何か話そろとしても、殆んど聾のように耳の遠い母に話すことは、

中々骨が折れるので、嘗て佐々木徹真先生から聴いた話を、

「お母さん、如来さまが摄取不捨と云われるのは、こうやられるのだそうです」

と云つて、母の袖を固くつかんで引張つたら、泣き出して喜ばれて共に法悦に浸りましたことがあります。理窟なしの味がよく取れて、広大なお慈悲の光明に包まれて居ることがあり／＼と感ぜられたのでありました。全く愚に還つた無我の境地でおりましたようでした。

親鸞聖人の八十八才の時のお手紙に

『故法然上人は「淨土宗のひとは愚者になりて往生す』

と候いしことを、たしかにうけたまわり候しうえに、ものおぼえぬあさましき人々のまいりたるを御覧しては往生必定すべしとて、笑ませたましいをみまいらせ候いき、ふみざたして、さが／＼しきひとのまいりたるをば、往生はいかがあらんずらんと、たしかにうけたまわ

りき』

とありますが、母は九十を越えては、五欲も枯れはてて、只食欲だけが残り、全く聖人の仰せられた通りの愚者となつて、念佛相続して居りました。

信は願より生ずれば　念佛成仏自然なり

自然は即ち報土なり　証大涅槃うたがわす

一昨年の秋頃から身体の自由を失うて居りましたが、昨年になつて兎角知覚が不十分であった。四月中頃よりは昏睡を続け、食事も摂らなくなつたのでリンゲルや葡萄糖を注射して栄養を摂ることになつた。知覚は全くなく只昏々と眠り、仮死の状態のまゝ、五月廿四日まで殆んど一ヶ月以上眠り続けたのであります。そして遂に消えるが如く息を引き取りました。

これを考えます時、この一ヶ月の間、無意識のまゝの母は、矢張りこの肉体の中に居たに違ひないけれども、六根六識は仍かないまま生きていたのですが、あれだけよく念佛を称えて、仏恩をよくよろこんで居つた母の心は何處に行つたのであらうか、このまゝ死んで行くとは、ここにはかない限りであります。

然し人の臨終は、死の縁無量でありますから、母の如く永く無知覚であるか、それが短いかの違いであるだけです。又は病苦に迫まられて四苦八苦の裡に死する人もあ

りましよう。いずれにしても私の智恵も分別も、後生に向つては何の価値もないことは明かであります。

そこで教えられることは、私共の往生の因は、私共の力で起す信心では駄目で、丸々弥陀廻向の信心でなければならんと云うことであります。

明治文壇の人、国木田独歩の病間録に、

「U先生は祈れと云われる。けれども病苦の中では祈る心さえ起らぬ。この祈り得ぬものを助くる神は無きや」と。何と悲痛な呼びではありませんか。我々の起す信心は皆この通りである。だが、有難いことは如来は、往生の因は私共の信心ではなく、弥陀廻向の信である。凡愚の信は役に立たん。念佛一つが往生の正因である、と仰せられてあります。

法然上人は、四十三歳の時「余が如きの下機下きの行法は、阿弥陀仏、法蔵因位の昔かねて定めおかるるをや」と、お喜びになりました。

親鸞聖人は、歎異鈔に、

「親鸞におきては、ただ念佛して弥陀にたすけられまい

らすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別

の仔細なきなり云々」

又、和讃に、

淨土の大菩提心は

願作仏心すゝめしむ

即ち願作仏心を
度衆生心といふことは
ごくよう

即ち願作仏心を
度衆生心となづけたり。

度衆生心といふことは
度衆生心となづけたり。

即ち願作仏心を
度衆生心となづけたり。

よ」と云つた、という話である。

奥山に枝折り枝折るはたがためぞ

親の身すて帰る子のため

親の慈悲は理屈なしの絶対である。捨てに連れて行く我が子が可愛いのである。これが親の慈悲というものだ。この絶対の親の慈悲に溶かされるのだ。久遠劫來、たすけにやおさん、という親様の慈悲に、この曇劫流転の難治難化の私が溶かされて、何の議論も、理屈もなしに、あら有難やと、丸めて溶かされるのである、と云う話をよくして聽かされた。

涅槃經に、

「如來は一切のために常に慈父母となりたまう。まさに知るべし諸の衆生はみなこれ如來の子なり。世尊の大慈悲は、衆のために苦行を修したまうこと、人の鬼魅にくわされて、狂乱して所為多きが如し。云々」

御和讃に、

釈迦弥陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

我等が無上の信心を

発起せしめたまいけり。

父は病弱のわが身をかえりみ、恒に生死嚴頭に立つて、このような法縁に会うて居りましたので、お慈悲を取りつめて味うて居つたようあります。五十一才の暮れ頃から病も重く、身の自由を失うようになりましては、子供の我

ければできないことで、穢土に住する煩惱にさえられた父の言葉ではないであります。

この父と母の臨終の有様を考えますと、父は法の深信、母は機の深信を、共に身を以て教えて呉れたように思われるのであります。

私共兄弟は、このような父母に育てられて、後生の一大事を知らされ、皆念佛を相続させて頂くようになつたのであります。何たる幸せであります。聖人の「たまたま行信を獲ば遠く宿縁を喜べ」と仰せられたことを感ずるのであります。

菅瀬先生は、父の死後、我々に本典の中から

「前に生ぜん者は、後を導き、後に生ぜん者は前を訪い連續無窮にして願くば休止せざらしめんと欲す、無辺の生死海を尽さんが為ゆえなり」

の「安樂集」の御言葉を引いて戒めて下さいました。

私は古稀を四つも過ぎる年になりますが、つねに考える

ことは、此の世に生れ来て、今まで何をしたかということです。親鸞聖人の仰せられた「一生造惡」ということに尽きるのです。一生の間名利を追い、安樂を求めて七十余年過して來た。「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し」と仰せられたことは、私の一生を如実に仰せられたも

々に法義話を聞かせて、常に念佛を相続して居りました。明けて五十二歳の春、三月六日に亡くなつたのであります

が、亡くなりまつ三日前に、自分でも死期の近づいたことを感じたものか、皆で頭を剃髪して呉れと申しまして、子供や家族に剃刀を当てさせて、遂に頭を丸めてしまいました。そして「今日は皆にお別れをするのだ」と申しました。平素父が好きであつた素麺やお鮓司などを作らせて、子供や家族や兄弟を招んで御馳走をして申しますには、「皆、永い間世話をよくしてくれて有難う、厚くお礼を申します。わしは皆と、これが今世のお別れである。けれども、有難いことには、如來様の願力一つで、お淨土に参らせて貰います。わしが何處へ行つたかと心配してくれるな、わしはちやんと阿弥陀如來様に引き取られてお淨土に先に参らせてもらうている。皆あとからお淨土に参らせてもらうて来ておくれ。今世のお別れであるがこれはしばしの別れである。お淨土で会わせて貰いましよう。皆、法義を大切に相続しておくれ」と

と、皆にねんごろな別れの言葉を述べました。このことがあつて後は、念佛外は他事を語らず、二、三日は昏睡状態となりまして遂に息を引き取りました。死の直前にあつて、このような大獅子吼をするということは煩惱を断ぜずして涅槃を得た、正定聚の位に住するものでな

のであります。
私が子供の頃、瓢箪を人形に作つて、門付をして来て居つたものがあります。それを今考えて見ると面白いのです。

「瓢箪や」「キイ／＼」

「わりやー（お前は）何處から来たら？」

「大阪から來た」

「何をしに来た？」

「錢をもうけに來た」

「錢をもうけて何にする？」

「酒をのむ」

「酒の肴は何なら？」

「章魚々々」

この問答を面白おかしくするので、その門付について歩いたことを覚えて居ります。今頃になつて、この問答を私の心に聞かせてやるのです。即ち

「お前は何処から來たのか」

「何をしに來たのか」

「錢を儲けて何にするのか」

「名利を追うて何にするのか」

と私の心にたずねてやつて「念佛を喜べよ」と言うので

藤先生の「明師の言葉」の中に

香樹院徳龍師の「自警」の文には「かえすぐもよく聞けや我心」とあり、一蓮院秀存師の文には「私一人といふことを忘れぬようにしてくれよ我心」とあり、また

「さみしからうが、さみしがらず思うてくれよ我心」とある。実に感慨深いものがある。香樹院や一蓮院のような大徳でさえ、我と我が心に云い聞かせて居られる。懈怠どうしの私共では、常に我心に云い聞かせて、念佛相続せねばならんと思うことです。

菅瀬先生は

「如來世に興出したもう所以は、唯弥陀の本願を説かんがためなり。

我々が人界に生を受けた所以は、唯弥陀の本願を聽かんがためである」

と常に申されたことを思い出すのであります。

私共は、一生名利の二つを追うて夢を見て来たのですが、

七里恒順和上は、

「利を得るなれば無上大利、

名を獲るなれば諸仏称讃」

と申されてありますそうです、世間の利も名譽もこの世

内は愚にして外は賢なり

花田正夫

聖人八十三歳の時『愚禿鈔』上下二巻を著され、その上下ともの巻頭に

賢者の信を聞いて愚禿の心をあらわす。

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり、

愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり。

と、同じ御文を繰り返して居られます。

さて雲英講師は、「上下二巻のはじめに誌された言葉

で、単に御丁寧に同じことを繰り返されたというのでなく、同じ白露でも置かれた木の葉の色によつて、それく綠に紅に輝くように、上巻の、教相を説かれたところでは、賢者とは、上代上智の人、下巻の、安心を説かれたところでは、他力の信心者、広大勝解の人を賢者と呼ばれている」と云つて居られます。有難い御領解であります。

さて上代上智の人と申すべき童樹菩薩の『十住論』に、「内に正智と善心があるのを賢人の相と云うが、外形を見たのではその内は知り難い。内に智慧や功德をもつ

四?

だけです。弥陀廻向の大慈は、三世を貫く無上の大利であり、十方法界の諸仏の称讃せられる大なる名譽であります。世間的な夢のよくなき小さな名利にくよ／＼するな、それより無變の大きな名譽を獲よとの仰せであります。

又法然上人は、

「現世のすぐべき様は、念佛の申されん様にすぐべし。念佛のさまたげになりぬべくは、何なりともよろずをいといすて、これをとどめべし。ひじりで申されずば、ひ妻つまをもうけて申すべし、妻つまをもうけて申されずば、ひじりにて申すべし。……衣食住の三つは念佛の助業なり」との手厳しい仰せであります。このような教の前には、ただ慚愧に耐えないであります。でも、聖人の「しかれば、大悲の願船に乗じて、光明の廣海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転す。即ち無明の闇を破し、速かに無量光明土に到りて、大般涅槃を証し、普賢の徳に遵したかなり。知る可し」

のこの御文に接するとき、歓喜胸に迫り、感謝のこころ身に沁みるであります。

ここに母の一週忌を迎えるにあたり、仏恩の広大なるを感じ、思い出すままを記して、父母の鴻恩を謝する次第であります。

無辺の雑毒は仏心を侵し

攝取の光明は業機を覺す。

一生造惡頑迷の輩

偏ひだれに大悲を仰いで往淨を期す。

清人、識す。

私は青年の頃、孔子の「聖人は独りを慎む、小人は閑居して不善をなす」と云う論語の一節を読みまして、初めは「それはそうである、それでこそ聖人と言える、自分もすこしでもあやかりたいものだ」と生意氣にも考へたことがあります、それによつて知れて来ましたことは、自分

が独りで居る時に、次から次へと雲のように湧いて出る思
いをかえり見ますと、まことに人前どころでなく、自分と
自分に恥じるばかりの醜状に、小人にすぎない自分を知ら
されました。六十に近い今もなおその通りであります。

又、ソクラテスは「真知は無知なり」と告げ、生涯師と
呼ばれるのをこぼみ、如何にも無智にかえつて居るのに心
うたれます。孟子はまた「人の患は、人師となるを好む
にあり」と諷めて居ります。

老子は「豪商と云うような人は、商品を深く蔵にしまつ
ていて外見には虚しいよううつるが、恰も盛徳の人の容貌は愚者のようにある」と述べています。

更に、キリストは「心の貧しき者はさへわいなり」と常
に弟子を諷めたのも有名であります。

そして、大空の星を仰げば仰ぐほど、自分の微弱さに恥じ
入るよう、「内は愚にして外は賢なり」の愚者の狂態邪
賢者の教をききますと、皆「内は賢にして外は愚なり」の
徳風にふれるのであります。

次に下巻の賢者は、他力の信界に逍遙される人々、それ
は七祖を初めとし、仰信の人々を指されたのであります。
す。法然聖人は「十惡、愚痴の法然」と生涯名告られ、源

信僧都は「余が如き頑魯の者あにあえてせんや」とも「極重惡人」とも申され、善導大師は「我等愚痴身昧劫來流转」とも「自身は現に罪惡生死の凡夫、曇劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなし」と深信されたのは有名であります。その師、道綽禪師は「一生造惡」と申されました。

このように、内に深く信心の仏智をたくわえられて、外

相には、愚者、悪人に帰らされているのであります。

さてこうした他力信心の先達の教を聞かれるについて、聖人御自身は、自分はそれとあへこべである、どうしても「内は愚にして外は賢なり」の域を出ることの出来ぬ身であると告白しているのであります。

俗にも「みのるほど頭の下る稻穂かな」と申しますが、白穂は何時までたつても頭が下りません。狂人は狂を自覺出来ぬように、眞の愚者の故に愚の自覺も出来ない身であるという告白であります。愚癡悲歎述懐和讃に

板 浄土真宗に帰すれども眞実の心はありがたし
虚偽不実のわが身にて清淨の心もさらになし
外儀のすがたはひとごとに賢善精進現ぜしむ

食贋邪偽おゝき故、奸詐ももはし身にみてり
と述べられ、『唯信鈔文意』には

「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ」というは、

淨土を願う人は、あらわに賢きすがたと善人のかたちを

ふるまわざれ、精進なる姿を示すことなかれとなり。その故は「内に虚假を懷けばなり」と。

「内」はうちとい、心のうちに煩惱を具せる虚なり假
なり、虚はむなしくて実ならず、假はかりにして真な
らず。しかれば今この世を如来のみのりに末法悪世
と定めたまえる故は、一切有情まことの心なくして師長
を輕慢し、父母に孝せず、朋友に信なくして、惡をのみ
このむ故に、世間出世みな心口各異・言念無実なりと教
えたまえり。「心口各異」というは言葉と
心のうちに実なしというなり。「実」はまことといいう言
葉なり、この世の人は無実のところのみにして、淨土を
ねがう人はいつわりへつらいの心のみなりと聞えたり。

世を捨つるも名のところ・利のところをさきとする故な
り。しかれば善人にもあらず賢人にもあらず、精進のこ
ころもなし、懈怠のところのみにして、内はむなしくい
つわりかざりへつらう心のみつねにしてまことなる心な
き身とするべし。云々。

と詳しくのべられ、更に八十八歳の御筆には
よしあしの文字をも知らぬ人は皆
まことのところなりけるを

信僧都は「余が如き頑魯の者あにあえてせんや」とも「極重惡人」とも申され、善導大師は「我等愚痴身昧劫來流转」とも「自身は現に罪惡生死の凡夫、曇劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなし」と深信されたのは有名であります。その師、道綽禪師は「一生造惡」と申されました。

さてこうした他力信心の先達の教を聞かれるについて、聖人御自身は、自分はそれとあへこべである、どうしても「内は愚にして外は賢なり」の域を出ることの出来ぬ身であると告白しているのであります。

俗にも「みのるほど頭の下る稻穂かな」と申しますが、白穂は何時までたつても頭が下りません。狂人は狂を自覺出来ぬように、眞の愚者の故に愚の自覺も出来ない身であるという告白であります。愚癡悲歎述懐和讃に

板 浄土真宗に帰すれども眞実の心はありがたし
虚偽不実のわが身にて清淨の心もさらになし
外儀のすがたはひとごとに賢善精進現ぜしむ

食贋邪偽おゝき故、奸詐ももはし身にみてり
と述べられ、『唯信鈔文意』には

「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ」というは、

聖人はかくして、私共の姿を御自身の上に照らし出され
て、本願の御目あてはそこにあることを、御身にかけてお
知らせ下さるのであります。

完。



あとがき

霜月となり、紅葉も大方散りました。やがて隨所に報恩講の行事がとりおこなわれる事でしよう。赤く熟した柿の実が美しい野を飾つて居ります。

十月初旬、四年間フランスに留学している山田宰さんが、御家族四人で帰國せられました。何よりの土産は、歎異鈔の仏語訳の完成をして下さつたことです。これは池山先生の独文訳を根幹にして下さったのです。

十月十五日は、正午の法事での慈光会に出席、先ず近角先生を慕われ私共を引立てて下さつた那須野一乗法師の靈前に几坐して感無量でありました。発願寺、善照寺、永順寺、蓮光寺、専覚寺様、を始め農繁期を押しての御同朋方の御来会、午前午後と法雨に浴しました。但し西村武三さんが病院で如何ばかり心を配つて下さつたことか……。

十月十九日に突然近角真觀様御来庵。今回はすつかり元氣御恢復の模様、嬉しく、頗もしく思いました。八胃力イヨウでありました由、炭労の沢山の離職者の就職運動に東奔西走の姿、談合も十五分間ありました。真觀様の大学入学の時「将来の日本

は労動問題が大切であるから、経済学をおさめて、信心のうえからその問題と取り組むように」と、常觀先生の御指示がありました由、すりと前に承つて居りますが、真觀様のこの御活動の根源に仏心の存しますことを、知るべぞ知ることであります。

十月廿八日の池山寿は淨住寺の榎原さん

が「今度の廿五回忌は先生主催とでも申さればあらわし得ない、時機到来の会……」と申されました。まことに今年は池山寿夫様と一緒に参會出来ましたことと云い、十月号には未発表の御講話「しみこし」を掲載させて顶きました事と言ひます。

いすれぞの一日会の模様は後日に御伝え頂上げましう。

川畑様の原稿は、自照誌にのりましたが、ことに愛穀桜を偲ばれ、御縁の深さに有難く原稿を頂きました。

西本清人様は岡山県の方で御兄様の清吉様、御弟様の清三様と、三への御兄弟が同一念仏裡に逍遙せられ、而もよき父、よき母を持たれていて、法味のあふれます追吊記を頂きました。厚く御礼申し上げます。

毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一

道会。南区駒上町二ノ八八。市電新郊通
一丁目下車。
毎月廿四日午前午後、昭和区小桜町教西
寺法話会。市電御器所通下車。

住所録

東京都目黒区上目黒五ノ二、五〇七

近角直觀

名古屋市東白壁町一八

池山寿夫

京都市衣笠北高橋町四

川畑愛義

高松市吉浦町区大吉浦町七八〇

西本清人

定価一部 三十円(送共)
一年 三百円(送共)

名古屋市南区駒上町二ノ八八
編集・発行人 花田正夫

印 刷 人 本 田 政 雄
名古屋市南区駒上町二ノ八八

發行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番